



～延藤が縁側的な視点で今を読み解く～ **ENDOKUKAI 1**

『なでしこジャパンにみるまちづくりの極意』

1. 目標設定：ワールドカップ優勝（震災復興・コーポラティブ住宅等）
2. 目標実現の覚悟：「本気の覚悟」、踏まれてもへこたれない、自生のしなやかさ、「勇気をもってのぞまないし幸運は訪れない」（オシム）
3. プロセス：激しいトレーニング（全力坂）、バストを尽くし合う共有体験、「入念な準備に根ざす奇跡」（オシム）
4. 集中力、瞬発力：瞬間の最適相互判断、アウンの呼吸（宮間のコーナーキック→沢の同点ゴール）
5. 持続力：最初は相手ペースでも、意志をもってのぞむ限り尻上がりマイペースにもちこめる、「私たちは走って、また走った。疲れていたけど走り続けた」（沢）
6. トラブル発生：あわてない、あきらめない姿勢は「ありえないことはありえない」状況を生む
7. 監督（専門家）：上から目線ではなくイーブンの関係、「選手を常にリスペクト（尊敬）している」（佐々木監督）、笑いやジョークで気分を和ませる
8. 信頼：「私を信じ、みんなを信じる」、「仲間のおかげ」（海堀）、「練習が厳しい時は、『体調を考えてもう少し抑えてほしい』と相談できた。それだけ信頼関係ができていた」（沢）
9. 楽しむ姿勢：「つらい」と思わずに全てを「楽しむ」、「日本の選手の方が楽しそうにやっていた」（川澄）、PK戦の前に「ここからもうけものと思って楽しもうや」（佐々木監督）
10. 想像力：見えないゴールをイメージする力、長い期間の入念な準備をすると夢が実現する姿が想像つく（沢）
11. 物語的：ナラティブ（語り）アプローチ＝人間は物語る存在、物語とは経験を組織化し意味づける「意味の行為」（ストーリー性、一人一人が主人公となって状況を劇的につくり変えるプロセス）
12. ドラマ的：無関心な人に気づかせる社会的波及性
13. 女性の活躍：「男女同権が進歩している社会は女性サッカーが強い」（米国監督）思いやり、心（しん）の強さ、コミュニケーション能力、結束力 etc. は日本女性ならではの（特徴）＝楚々として美しく、凛として強い「なでしこ」
14. 自省の心：PK戦はあくまで引き分け扱い「90分で勝てるようにならなくてはならない」（宮間）
15. 未来志向：常に「新しいはじまり」の途上感覚、「自分にとってこの優勝は通過点。次につなげないと」（熊谷）

なでしこジャパンは「夢は見るものではなく叶えるもの」を実践してみせた。ワールドカップを制覇した7月17日の2日後の愛知淑徳大学での「まちづくり」の講義の前に、「なでしこジャパンにみるまちづくりの極意」を白板に列挙し始めたなら、学生達ものつてきて、左記のようなまとめが出来た。

*

ところで、五輪アジア予選最終

戦では、W杯後からつづく過密日程と準備不足とロンドンを目指さなければならぬ重圧とで、思うような試合運びにならなかった。しかし、泥臭く勝ち点を奪っていくという成長のあかしを見せて通した。澤は「W杯のイングリッシュでもそうだったが、悔しい思いをして気づくことがある」と前を向いた発言。そこで、

16・悔しさをバネに
を付け加えたい。（延藤）

<PROJECT ENGAWA>

- ・ 錦二丁目コーディネート …… 2 P
- ・ トーホク志縁プロジェクト …… 4 P

<長者町なう!>

- ・ まちなかアート発展計画主催トークイベント …… 6 P
- ・ 長者町大緑会 …… 6 P

<まちの縁側育くみ事業>

- ・ まちの会所通信 …… 8 P
- ・ GOGO!ルポ …… 9 P
- ・ ジネンカフェだより …… 10 P
- ・ 編集後記 …… 10 P

錦二丁目まちづくりマスタープラン

実現に向けて内発的動きが...

地区再生まちづくりのパワーは、外から来るものではなく内側からくるものである。

*

錦二丁目まちづくりマスタープランが2011年4月にまとまった。それが生まれる過程は3年間でマスタープラン企画会議が計35回、まちづくり意見交換会等、地区内外の人々の間での話し合いや部会をあわせると100回以上にのぼり、知恵と批判の交換のコミュニケーションのおびただしい機会があった。その作り方は「アクション・オリエンテッド・プランニング」



写真1: まちづくり意見交換会パネリストは全員まちの人(経営者、従業員、飲食店の大将、など...)

(活動しながらまちづくりを進める)に特徴があったので、会合という動きから、トリエンナーレによるアートとまちの出会いの動きにいたるまで、多様な人々の動き・活動に彩られていた。「にぎわいの元気経済」「つながり共生文化」「くらし安心居住」の3本柱の目標と、各目標の実現のための多種多様なまちづくりの課題は縦横無尽に、ゆるやかなつながりのなかに体系立てられたマスタープラン。複雑多岐にわたる中味が一冊に束ねられると、今までまちの人(地権者も居住者も働く人も)にとつて自分のまちへの関心やテーマが全体の中で位置付けられていることを理解しはじめる。自己のまちへのかかわりのポジション(位置づけ)が明快になったのだ。

このように、コミュニケーション(話し合い)・アクション(活動)・ポジション(位置づけ)を映したマスタープランは、手に



写真2: マスタープラン「これからの錦二丁目 長者町まちづくり構想(2011-2030)」

取る人々にとって、自分の内側から気づき促されていく。冒頭に記した「地区再生まちづくりパワーは外から来るものではなく内側からくるものである」の意味はここにある。

*

マスタープランの無数の課題群の中から、まちづくり連絡協議会理事会は8つの当面重点課題を選んだ。プロジェクトチームを立ち上げ、まちの会所が直接関わっているプロ

ジェクトについていえば、次の3つの新しい動きがにわかには始まった。

第1に、地区計画プロジェクトチームは、地区内構成員全員に、その意図を伝える為に、まず56ページにわたるマスタープラン本編をわかりやすい手引き編(4ページ)にまとめた。その内容は、本編の要点のキリバリではなく、ひとりひとりの地権者・居住者の心に届く表現と分かりやすさにおいて、本編からさらに進化するものになった。新旧の理事達は、ホンネトーク



写真3: 手引き編要約会議では町内会長などまちの人自身で、地区内の人々への伝え方を議論する

をもって、町内会のひとりひとりに自信をもって手渡せる中味・レイアウトへの創意工夫をこらした。

第2に、長者町都心居住プロジェクトチームは、主題を今後系統的に実践していくための活動方針を明確にした。即ち、このまちの既存空間リノベーションの潜在的可能性を把握するための基礎調査を行い、さらに、潜在的可能性を顕在化させるための具体的課題を明らかにした。例えば、まちぐるみの耐震診断、内部・外部空間の魅力づくり、住むまちになるための機能の補充、ユーザーグループ形成等。

第3に、公共空間デザインプロジェクトチームは、理事・行政・民間企業・議員、我々アドバイザーの参加のもとに、車中心のまちから人中心のまちへの方針をもって道のデザインに身を乗り出した。こうしたことを地区住民・関係者が合意するならば行政が後押しする協働関係づくりへの道筋がみえ始めてきた。



写真4: 路上イベントは道の使い方イメージを育む

その他のプロジェクトも夫々に生き活きと動き始めている。マスタープランは、NPO・専門家で閉じてつくり押しつけたものではなく、地区の人々から受容され「自らのあらゆる行動の指針にしよう」(ある理事の発言)とされている。今後の展開が楽しみである。(延藤)

※特別付録として、『これからの錦二丁目まちづくり構想(2011・2030)手引き編』を同封しています。ご覧いただければ幸いです。

オーラルヒストリー 一口承歴史が未来のまちの風景を育む

まちの人は記憶を語り、未来像のヒントとしてマスタープランに生かされ、「長者町カルタ」にもなった。カルタの題材を巡るまち歩きをする人達まで現れた。駐車場になってしまった場所も、カルタを辞書のように引くと、そこでの暮らしの風景が蘇る。それは未来を描くこととよく似ていて、そんな想像力を働かせる「アソビ」好きな人たちがまちの内にも外からも現れ始めた。未来のまちの風景は明るい。(名畑)

東北フッコウとわたしたちのまちの

希望への道筋を考える

2か月ぶりに東北の地を訪れると、ガレキの山だった荒浜が(仙台市若林区)緑につつまれたやんわりとした風景に変わっていた(9月4日)。車から降りると、その印象はただ遠望していた他者の目線であったことに気付いた。自



写真1:震災前の荒浜地区。豊かな松林に囲まれ中央に通るのは貞山堀。(c:NHKテレビジョン特集「イナサ 風と向き合う集落の四季」より)

分の足で歩き足元を見れば優しい顔立ちの木彫りの像、表札、トロフィー、墓石・・・一面を緑にしていたのは、間間から貪欲に根を張る雑草だった。津波の痕跡が足の裏から頭の先に抜けるような身震いを感じた。一方漁師の方々は飾らない笑顔を向けて現場を案内してくれている。津波の恐ろしさを伺うこともできたが、海や自邸の跡を見ると、むしろ3・11の暮らしや漁など日常の話に花が咲く。「テトラポットの裏側でホッキ(貝)やなんか捕ってね、岸の作業場の人に『おい、頑張ろうねー』と手を振るんです。『今帰るぞー』とかね。」ユウコさんは、「絶対に先祖からのこの地で、両



写真2:荒浜地区(9月)。僅かに残った松に引っ掛かる漁業網と家の基礎。

親を見送りたい。元の場所で暮らしたいんです。」という。(仙台市が建築禁止区域に指定しようとしている。)風の強い日は漁師でも借りている菜園で野菜作りをした



写真3:生い茂る雑草に埋もれた屋号(船の名)の表札。

り、網の手入れをしたり、常に波と風を読みながらの日常だ。「ここさいないと、波も風もわからない。まち(仮設住宅)にいたら、台風が来るのだから、気づかなかつたんだべ。」そういうマサトモさ



写真4:一隻だけ残った船で解禁後初の赤貝漁に出た佐藤さん。とれたてをご馳走になった。

んは、実は「子どものためには移転したい」と考えている。漁民どうしても考え方は様々、ましてや新旧住民・農業・漁師・勤め人・・・立場の違いでも当然、今後への考えは様々でとても複雑だ。

私は代表の延藤と共に、地元自らが立ち上がって今後を考える「荒浜復興まちづくり実行委員会」の場のお手伝いと、NHK(東北)の「被災地の目線」という番組の企画で住民の方々との対話の機会を得た。まちづくり実行委員会では冒頭からやや荒れ模様であった。行政の提示する「防災集団移転」に伸るか反るかの立場の違いがぶつかり合った。マスコミの「高台移転」の情報や行政からの「防災集団移転」の計画説明が先行してしまい、住民の不

安や焦りを煽っている。ある人は「行政の計画は地上げ屋と同じだ」と言った。モノカネセイドの話に巻き取られてしまうのも仕方ない状況だ。「ゆっくり考えたい」ということも許されない焦り。しかし、伸るか反るかの話には「納得」を得る気配すらない。やはり、冒頭漁師の方の語ってくれたような、記憶や願いに未来への答えがある、という信念で、ひとりひとりがつぶやくことができ、その位置づけをみんなで共有し、「納得」に至る、普段大切にしている「まち育て」の作法が本当に大事であることを、ここ被災地でも急務であると実感した。私の今回の役割はつぶやきを大きな模造紙に書くことだ。つぶやきを構造的に整理し「見える化」してみんなで共有する。そして延藤はそこから未来を考えるためのテーマをくりだした。名古屋から時折尋ねることで出来ることは本当に限られていると思いき知らされながらも、少しずつ、「納得」への道程を進むお手伝いを・・・自分たちが

ーフッコウへの芽生えー

荒野となってしまった田んぼの一部に白と赤の花が広がる。フッコウを体現しているかのような綿花の花に勇気づけられた。稲作はできなくなったが、塩害に強い綿花で農業の立ち上がりを目指すのは渡邊静男さん。雑草取り・花見会には120人もボランティアが集まり、みんな元気をもらって大阪や東京に全国に帰っていく。東北コットンプロジェクトは、JALや多くの衣類メーカーも巻き込んで農業フッコウの花を咲かせようとしている。(http://www.tohokucotton.com/)



綿の花は白く咲き、1週間でやがて赤に染まる。その後実となりはじけると綿になる。10月28日には収穫祭が開かれる。

希望する暮らし方は?それを実現するために手法と条件を整理しよう。高台移転はその中の一手法だ。高台であれ、元の土地から近くに移転する場合であれ、元の場であれ、ふるさとを再現しよう、

あなたにとっての「ふるさと」って何ですか?東北は、日本全土のわたしたちの希望への道筋にもメッセージを投げかけてくれている。(名畑)

『コトバの奔流』

ある日劇作家の岸井大輔さんからトークイベントのお誘いのメールが届いた。

「僕は延藤先生の『縁側』もアサダさんの『住み開き』も、日本のエートスを現代社会に生かすユーモラスな概念であるように考えます。ここ2-3年若い人を中心に、私発の軽妙なコミュニケーションが現実にもコトが持続する形で起きようになってきたと感じていますが、その背景には、延藤先生からアサダくんまでが開発した概念に負うところが大きいと思います。そこで、事例報告+パネルディスカッションの形式をとり、お2人にそれぞれのキーワードをいくつか紹介いただき、それを踏まえて3人で話す、という形式がよいのではないかと考えています。」

8月10日(水) 17:30、長者町のレストランツキダテに約30~40人の人が集まった。パネリストが東京、名古屋、大阪在住なので、参加者も東京から神戸まで東海道横断的であった。

冒頭、小生が「カレイのエンガワのようにおいしいまちの縁側」のビヘト参加者の陶酔をよんだ。コトバの奔流ののひととき。生きることとまちの育みに向けての発想転換を促す心地よいシャワーを浴びつつ、今後に向けて学んだことは次のようなキーワードであった。

- コドモのさんざめく声は閉じた状況を開く
- トことん面白さ・ユーモア・意外性をわかちあう
- アい矛盾することがつながる共生の創発を
- アウンの呼吸で共に心を透かし見る相互敬愛へ
- トキとともに育ちあい熟しあえる友情に助成を

頭韻要約法として頭文字を束ねると

「コトアート」

この日のトークイベントは、ヒト・モノ・コトの関わりをアートによる新しいまちづくり・まち育てを「コトアート」という新しい「コトバ」を生む出来事であった。

長者町でのアートトリエンナーレも「コトアート」、錦二丁目まちづくりマスタープランの実践も「コトアート」なんや。「コトアート」の意味す

ジュアルプレゼ。ライプ感がいい、イメージがスツと入ってきた」と2人に好評。次いで、岸井さんは「コト」のつく言葉をあけて下さいと、聴衆をまきこみつつ、コトのハのハツパを撒きちらすコトの場を立ち上げ、コトコト/ことごとと鍋でおいしいものが煮えるような感覚を会場全体に喚起させた。さらにアサダワタルさんは音楽家かつ事網 (Kotoami) という「日常再編集」コーディネートとして、大阪での「住み開き」とまちと私をつなぐ意表をつくアクションの映像紹介をもって、「孤」となる状況を楽しみながら変容させる「異なる」場

ることと進め方のエッセンスがこのいつに詰まっている。

こんなステキな「コトアート」の場を企画・実践された岸井さん、その場を盛り上げられたアサダさんと参加者。そして、宣伝・運営にあたられた長者町まちなかアート発展計画に深く感謝の意をあらわしたい。岸井さんからその後、お礼のメールが届いた。

『今、僕は、延藤先生のスタッフが長者町で獲得してきた暗黙知を、友人のアーティストと共有できるようにすることに興味があります。なので、名畑さんともゆっくり話したいです。(アレントの話もしたいです。)' フライングぎみの行政マンがこっそり世界を救っている問題についてのトークイベント」延藤先生にやれといっていただけで、開催の勇気がわきました。他にも「主体者なのに手柄だけ持っていられる聡明女子リーダー鼎談」とか「大工とアートボランティアの両立の楽しみと苦惱グループディスカッション」とか「アートプロジェクトの端の端にいる、写真大好き男子による、自薦写真展」とかもやりたいです！名古屋か京都で！！延藤先生のプロジェクトアイデアももっとお伺いしたいです。今後ともよろしくお願いします。』

岸井さん、アサダさん、また一緒に遊びましょう！(延藤)

「長者町を舞台に活躍するアート活動家達による夏のプレゼント」

なう！ 長者町

長者町でとれたフレッシュなニュースたち

長者町大縁会

閑所路地 老いも若きも集う庭

打ち水縁台空に満月

2006年に錦二丁目まちづくり憲章づくりのワークシヨップで詠われたこのウタは「昔のこのまちの暮らしの風景を伝えてくれると共に、未来かくあれ」のイメージの代表として輝いている。錦二丁目長者町通り、住む人は激減し、なんとなくよそよそしい表情を投げかける建物群の足元で、突如8月21日(日)8月21日は長者町通りの一部を通行止めにしてまちとアートのイベント「長者町大縁会」が開かれたのだ。あいにくの雨。シャッターを下ろした問屋の軒先に縁台を出すとともに、11時イベントがはじまった。NPOまちの縁側自慢の「出張縁台」だ。不思議なことに、縁台を出すだけで様々な人が集ま

シヨ(山本高之)、長者町オリジナル路上結婚式等、まちを巻き込んだ参加型のアート企画が目白押しだ。路上結婚式ではまちの長老が媒酌人を務め、アーティ



写真2 路上菓子撒きの様子

ストからまちの外から来た人や、子どもから大人、酔っ払い、様々な人が菓子撒きに参加し、アーティスト石田達郎の結婚を祝った(写真2)。集まった面々の多様さと、都会の中の菓子撒き風景の可笑しさで、楽しくておかしなまち中居住のイメージがむくむくと膨らむ経緯。

長者町のつばやきをまとめつつつた「色は匂えど長者町カルタ」については、21日は他主体であるカルタファン大会の「長者町ゼミ」が「カルタ大会」とカルタにちなんだまち案内「ブラ長者」を企画してくれた。参加者は遊んでい



写真1: 縁台に集う人々、背景に「縁側の主」

れた・・・。(写真1) 普段は閑散とした日曜なのが、そんなもてなしある暖かい風景の中で「長者町大縁会」は進んでいった。このイベントは、あいちトリエンナーレ2010を契機にまちとアートの出会いに触発されたまちの有志が集まってはじめた「アートアニュアル実行委員会」、「まちなかアート発展計画」、「長者町ゼミ」、当法人が運営を担うまちづくり拠点「まちの会所」と「まちの会所 Rantae」が協働で行った催しだ。縁台の人々が見守る中、アーティスト青田信也による参加型シャッターペイントが進行していく。12年前、まちづくりの狼煙として、灰色からカラフルに塗り替えられたシャッターを、完全に塗り替えてしまおうではなく、記憶を残したまま生まれ変わらせるコンセプトだ。他にも、子どもたちのまちなかファッショ

自体はオーラルヒストリ(口承歴史)をまとめたとあって、少し難しいかと思いきや、大会チャンピオンはなんと8歳!大人とのガチンコ勝負で勝ち取った。(写真3) 彼のお母さんによると、絵柄を見ながら、カルタに込められたまちの想いなどの解説を聞いてイメージとして覚えたんだらう、とのこと。縁台の前で誇らしげに表彰をされて胸をはる男の子と共に、カルタ編集の私たちも胸をはって、とてもうれしい気持ちだった。

さて、冒頭のウタをふりかえりますと、路地を庭にして老いも若きも縁台囲んで・・・詠った、中田さんは天国から見ても、微笑んでくれているでしょうか。それとも、「一日ではまだまだ!!これを日常にできないとね。」と仰っているかも。(名畑)



写真3: 長者町カルタ大会、勝負は真剣!カルタ大会仕様にしたバスの中で対決は、応援隊がバス内にも外にも(バスはアーティストの活動による:移動美術館 mobium)

まちの会所 通信

『まち中緑園都市を育もう』

台湾大学「張聖琳先生」
来日講演会

7月26日(火) 台湾大学の張聖琳(チャン・シェンリン)先生をまちの会所に招き、まちの人や近隣大学生が集まって表題の学びと談論風発の会を行った。シェンリン先生は市民が主となって都市で食べられる緑を増やす運動をコーディネートとなつて進めている。19世紀の田園都市運動から食糧危機に至るまでの社会的背景を伺うと、食糧自給率日本(40%)台湾(32%)と両国の低さに驚く。しかし、緑園都市運動としてのコミュニティ・ガーデンづくりは、食糧危機以上に、社会的あらゆる課題を媒介する存在でもある、と

シェンリン先生は指摘する。多人種の集まるポストンで、食べるものも文化も違うアジア人とアメリカ人の文化コミュニケーションの場になつていたり、収穫祭を通しての社交・近隣関係づくり、子どもの学びと遊びの場、また荒れた高校生が問題を起さなくなったという心理的効果もあるという。そして食べるという文化の表現の場であり、アートの場にもなるというのだ。彼女が魅力的な取り組みを各地ですすめていくコツは、「ゴリラのゲリラ」の発想だ。鎌を持ったゴリラをシンボルマークに、どんどんゲリラ的にまず耕して



写真:「食の文化と街中菜園の出会いを!」チャン・シェンリン先生

いつてしまふ、楽しみながらの活動だ。住民たちの現場では、彼らを尊重し、彼らの食文化から学び、同じ釜のヌードル(?)を共に楽しみながら、菜園づくりと、小さな地域で循環するマーケットづくりのイベントに仕立てていく。地域を元気にする仕掛けでもあるこの取り組みは、状況によってはお医者さんの診療コーナーなど地域医療に取り組んだりもする。最後にシェンリンは、そのローカルな文化から押し上げられて、菜園づくりがあると結んだ。ここ名古屋錦二丁目から押し上げられた課題と菜園は今後どのように

つながっていくのか、「楽しみながらの発想」への沢山の共感と、実現のために必要な権利関係等の課題など活発な談論風発がなされたのち、延藤による頭韻要約まとめは左記の通り。
以上、頭文字を縦につなぐと:
「緑園都市」となった。
台湾・名古屋の同時代のまち育てへの示唆を受けとめ分かち合ったところで、第IIラウンド・夜の食文化タンケンに繰り出した。(名畑)

★ 錦二丁目まち育てにひきつけたキーワード ★

- リ** 理論を深め、実践を楽しみつつ、発想転換へ
～ゴリラのゲリラ～
- よ** 良きコミュニケーションを育む花・緑・ハチのコミュニティガーデンへ
～わがまちに芽生えつつある～
- く** 食うことにつながる様なグリーンガーデンをつくり
自耕自足→共育共食→まちづくり基金へ
- えん** 緑台夕すずみや、駐車場パーティ等、エココミュニティライフは人と人をつなぐ
- と** とにかくあきらめずに、人と緑の関係とまちのアイデンティティと誇りを育み、住む人を増やし夢の実現へ
- し** 幸せな暮らし・まちは、グルメと多様性と持続性
～地域の人も外からのファンもまきこもう～



『挨拶』

皆様、はじめまして! 皆さんのご利用をお待ちしています!

まちの緑側GOGO!が、平成23年5月5日(木) こどもの日にオープンしてから、あっという間に5ヶ月がたつてしまいました。

「音楽とスポーツ文化がいっぱい!」「ちょっとした出会い ささやかなご縁 細々としたつながり!」

GOGO! の キャッチフレーズです。まちの緑側MOMOの後をついで、まちの緑側育くみ隊のご支援を受けながらの旅立ちです。昭和13年生まれのトラトラトラ、73歳の三

羽ガラス永井充・櫻井孝則・加茂かつえが担当します。よろしくお願ひします!

『利用案内』

固定した曜日によって講座があります。自由な空間・場所の利用ができます。作品展示、十人前後の同好会、集いにご利用ください。

『歌いましょう!』



写真1: 山田邦子先生

まちの緑側GOGO!では、毎月第2火曜日、山田邦子先生の伴奏で楽しく歌っています。毎回、山田邦子先生がジャンルを超えて選曲してくださいました素敵な三曲(今回は、赤い花 白い花・少年時代・ピリブ)をゆつくり丁寧に仕上げています。小林三恵さんの「赤い花 白い花」は3回目ぐらい、すんなりと一通り歌うことができました。しかし、先生の指導で、ワンフレーズずつチェッ

クしていくと「ああ、こうも違うのか!」と思うくらい、相手に伝わるような歌い方が出来るようになります。井上揚水の「少年時代」と杉本竜一の「ピリブ」は今回が初めて。月を重ねて上手に歌えるようになります! たいものです!



写真2: みなさん楽しく歌っています!

『笑いのヨガ』

毎月第4水曜日には、講師の坂本智琴先生を岐阜からお招きして笑いのヨガを行っています。笑いのヨガとは、通常のヨガのようにポーズを決める静的な運動ではなく、話を

しながら「イメージで身体を動かしてみよう!」と身体全部を使いながら大きな声で笑うというちょっと変わったヨガです。みんなで手をつないでくるくる回ったり、つないだ手の輪をくぐったり・・・体操を交えながら大きな声で笑い、健康と幸福を呼び込みます!
体操の後は、テーブルを出して持ち込みのケーキとお茶でティータイム。女性達は楽しく話に花を咲かせ、こちらでも笑いがさく裂していました。写真をご覧下さい、皆さんの笑顔が決まっています!(永井)



写真3: ヨガの後のティータイム

ジネンカフェ だより

真のノーマライゼーション
社会を目指して・・・
「NPO法人くれよんBOX」
「かたひらかたろう」
との協働プロジェクト

『愛知県内のバリアフリー

観光地をご紹介します』

ジネンカフェVOL.053(8月)のゲストは、あいち旅サポーターの市橋和子さん。“あいち旅サポーター”とは、厚労省のふるさと雇用創成事業の関係で愛知県が創出し、名鉄観光が受託した事業である。高齢者や介助が必要な障がい者の方などが愛知県内を旅する場合に、無償で外出のサポートをする方たちだ。この旅サポーター6名全員がツアーの添乗員はもちろん、ヘルパー2級のガイドヘルパーの資格を持っている。福祉サービスの外出支援と違うところは、旅サポーターの場合は外出の目的地が愛知県内の観光地であることだ。

ひとはなぜ旅をするのだろうか？ 見聞を広めるため、リフレッシュ・・・、その目的は人それぞれである。それが、それは等しく誰もが望んでいることだろう。しかし、高齢者や障がいを持っている、車いすを使用していると、旅先での多目的トイレや、観光地、あるいは宿泊施設のバリアフリーの状況など、一般のガイドブックに載っていない情報がほしいものだ。あいち旅サポーターではそういう情報もHPで公開し、旅サポ等々の紙媒体でも提供しているという。

市橋さんはもともと長らく旅行の添乗員をされてきた方ではあるが、旅はどこへ行くとか、その目的地が重要ではなく、そこでの楽しみ方、人との出会いであったり、自然や動



写真1：あいち旅サポーターの市橋和子さん



写真2：皆さん真剣に耳をかたむけています。

物とのふれあいであったり、そのようなコンテンツが重要なのではないかと思っているという。私も旅好きであちらこちら旅をしているが、確かにハード的に不備なところでも、駅員さん総出で車いすごと階段を持ち上げてくれたり、一般の人が切符を買うサポートをしてくれたり、風景よりも人々の温かさが記憶に残っていたりする。

そう、あいち旅サポーターとは、外出経験の少ない高齢者や障がい者の旅のサポートをするだけではなく、人や自然との縁を取り持ち、思い出を作るサポートもする“思い出クリエイター”の側面もあるのではないだろうか。(大久保)

編集後記

川澄一代
まちの縁側育み隊会員。現在、地域との関係を大切に暮らすを実現する建築のあり方を模索中。
川澄一代設計事務所主宰。

皆様こんにちは。前回の告知よりも時期が遅れてしまいましたが、新しい編集方針の「ENGAWANEWS」ができあがりました。今回の編集作業を通して、改めて、NPO法人まちの縁側育み隊の活動内容や活躍場所がバラエティに富んでいることに驚きました。私自身の関わる、錦二丁目の活動に加え、東区ではGOGO!

さんがMOMOの活動を引継ぎ元気に活動されているし、ジネンカフェは、8月でなんと53回目の開催!! また、3.11以降、東北志縁プロジェクトも始まりました。NPOの活動全体を見渡す編集作業はまるで、まちの会所に置かれている延藤先生の絵本「GOD & HEROES」のようです。この絵本は、世界中の神話が絵本から飛

び出すポップアップ絵本で、ダイナミックな仕掛けと細部までこだわり抜いた作りこみで、ページを開くたびに思わず「おお〜!」と歓声をあげてしまいます。「GOD & HEROES」を目指してという、ハードルが高いですが、毎号、楽しんでいただければ、心を込めて制作していきたいと思えます。(川澄)